

ジャウイ文書研究会ニューズレター

第8号 2002年12月1日

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話 03-3238-3697 Fax 03-3238-3690

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

e-mail: midori-k@sophia.ac.jp

目次

- I. 研究会予定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 1
- II. 出版物からみた20世紀東南アジアのイスラーム・・・・見市建・・・・ p. 1
- III. 東南アジア島嶼部における使用文字交代の言語学・文字学的背景
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 澤田英夫・・・・ p. 4
- IV. シンポジウム「ジャウイ文書研究の可能性」報告要旨・・・・ p. 5
- V. 研究会記録
第15回研究会記録(2002.11.9)・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 11

I. 研究会予定

2003年1月26日(日) 上智大学

2月15日(土) 場所未定

詳細は後日連絡します。これまで連絡が行っていない方で、今後、研究会の連絡を希望される方は、事務局へご一報ください。

II. 出版物からみた20世紀東南アジアのイスラーム

見市 建(京都大学)

ジャカルタの大手書店やクアラルンプールのムスジド・インディア通りを訪れると、イスラームに関する膨大な書籍の山に出会う。その多くは明るいデザインが表紙を飾っており、必ずしも「宗教書」という重々しい印象を受けない。こうした出版物にはどのような種類があり、いつどこでどのような人々に読まれているのだろうか。そもそもいつ頃から多くの書籍が刊行されるようになったのか。果たしてそれまでのイスラーム出版物と根本的な違いがあるのだろうか。

出版物は市場を流通する「商品」であるがゆえに、生産者（著者や出版社）や流通経路（流通業者や書店）、消費者（読者）を比較的容易に知ることができる。いうまでもなく、出版物の研究は同時代のイスラーム思想や知識を知る上で欠かせない。生産者である著者や翻訳者、編集者はイスラーム思想や知識の源泉となる。多くは中東などで書かれたアラビア語の翻訳や注釈であるので、生産者は文化の仲介者の役割を果たす。もっとも、生産者は同時に「商売人」でもある。消費者のニーズによって生産物の内容も変わってくる。

東南アジアにおいて出版技術が紹介され、イスラーム出版物が出回り始めた 19 世紀から 20 世紀初頭にはイスラーム教育機関の教科書や一般向けの読み物として印刷されたキターブ（アラビア文字表記のイスラーム書籍）が流通し始めた。もっともこうした書籍も 1000 部以上の単位で印刷され広く販売されるようになったのは 1960 年代以降である。その頃にはすでにマレーシア語やインドネシア語の国語教育が拡大・定着し、ローマ字による表記が一般化しており、ローマ字によるイスラーム書籍も出回り始める。1980 年代以降には爆発的にイスラームの書籍の市場が拡大し、イスラームについての書籍が一般書店において大きな位置を占めるようになった。ローマ字表記が圧倒的な主流となるが、イスラーム教育機関やウラマーによる一般向け宗教講座では依然としてキターブが使用されている。

東南アジアの主流（シャーフイー派）のウラマーたちは中世以前にかかれたイスラーム法学（フィクフ）の古典を参照して法的な解釈や規範を導き出す。したがって多くのキターブがそうした古典の翻訳（perukunan）や注釈（sharh, hasyiah）であった。多くが中東のアラブ人によって書かれたものの輸入であるが、マッカに在住していた東南アジア出身のウラマーによる著作もある。そのなかにはマレー語などのジャウィも少なくない。中部ジャワ北岸や東ジャワのプサントレンでは 19 世紀末にはすでにアラビア語のテキストをジャワ語で解説する講義が行われていたが、それ以外のプサントレン、またマレー半島やカリマンタン島などではジャウィ表記のマレー語やジャワ語のテキストが使われていた。このため、ジャワ語よりもマレー語のジャウィによるキターブの方がより必要性が高かった。

こうしたキターブは主に東南アジア以外のマッカやイスタンブール、ボンベイなどで印刷されていた。20 世紀初頭の段階で存在していたのは中東などで印刷されたキターブを売る書店であった。大半の書籍が中東から輸入されていたためか、イスラーム出版物を扱う書店や出版社のほとんどはアラブ人の商人によって設立された。東南アジアではパタニやバンドゥンなどで先駆的な出版社が設立された。1948 年にはバンドゥン（西ジャワ）にアル＝マアリフができている。1955 年頃まではクルアーン印刷が主であり、毎月 1 万部ほどが出荷された。その後、キターブや読み物など数百のタイトルのイスラーム書籍を発行している。宗教書は一般書のように大きな書店で売られるよりも村から村、家から家をまわる行商人によって売られた。設立者のバハルタハは 1903 年にヨルダン南部に生まれ、1924 年にシンガポールに渡り、1930 年にメダンでパティック商人としてインドネシアで商売を始めた。その後、チレボンのアブドゥラ・ビン・アフフが経営する「カイロ書店」で働いたことをきっかけに出版の世界で働くことになり、1950 年代にはキターブの売買やクルアーン印刷販売を手がけていた

という。1970年代後半には、これまでジャウィで出版されていたキターブもローマ字表記の書籍として一般の書店で売られるようになる。現在までキターブの出版元として有名なトハ・プートラ・スマランは1978年に『キファヤトゥル・アフヤル』を、ムナラ・クドゥスは1982年に『ファトゥル・カリブ』のインドネシア語版（ローマ字表記）を出版している。

インドネシアにおいては、この1970年代後半にイスラーム書籍を専門とした出版社がまずバンドゥンで、その後1980年代にはジャカルタやジョグジャカルタなどで数多く設立された。バンドゥンの出版社プスタカとミザンはいずれも大学キャンパスにおける宗教運動の参加者たちによって設立された。1970年代後半から徐々に拡大した大学キャンパスにおける宗教運動（ダアワ・キャンパス）はIAIN（国立イスラーム学院）よりも、一般の大学で顕著に広がった。特にプスタカの場合はこうした宗教運動の担い手を対象に中東のイスラーム国家論や政治理論、思想書などが出版された。他方で、ミザンの出版物はダアワ・キャンパスに限らずイスラーム色を高めた都市のいわゆる新中間層をターゲットとしていた。アラビア語よりも英語からの翻訳が多く、神秘主義や宗教に関係のないノウハウ本も多く発行されている。英語からの翻訳は宗教書よりも、アメリカやヨーロッパの大学で訓練を受けた学者による研究書である。神秘主義についてはアル＝ガザーリーの著作など従来のキターブがラテン文字で発行されているものも多い。とはいっても現代の都市新中間層が従来のように教団（タレカット）に参加するのではない。彼らにとっては神秘主義も生活に関するノウハウ本もそれほど区別されて読まれていないのではないだろうか。

イスラーム復興は学生や新中間層のみに広がったわけではない。1980年代にジャカルタで設立された出版社であるグマ・インサニ・プレスやアル＝カウサールの主力商品は大衆向けの読み物である。とくに、社会や家庭における女性の役割や性生活について書かれたものなど、女性について書かれた読み物は顕著に市場を拡大している。より包括的な調査が必要であるが、マレーシアでも大衆向けに書かれた生活規範に関する書籍が急速に拡大している印象がある。

新しい出版物の市場の拡大は東南アジアにおける経済発展と同時に進行してきたイスラーム復興のありようをよく示している。直線的に進んできたわけではないが、学生の宗教運動、新中間層、大衆の順に出版市場が拡大してきた。バンドゥンの2つの出版社がキャンパスにおける宗教運動の活動家たちという新しい担い手によって設立されたのも象徴的な出来事であった。しかしながら、イスラーム出版物の内容がこれまでとまったく違う新しいものであるかということ、そうとは限らない。かつてキターブとして発行されていた古典のラテン文字による出版も少なくなく、中東における最新の議論を翻訳・出版するという構造も基本的には同じである。重要なのはそれぞれの出版物が読まれる社会的文脈の変化である。また、バンドゥンのミザンを含め、上で名前を取り上げた4つの新興出版社のうち3つはアラブ系インドネシア人によって設立・経営されている。かつてのイスラーム書店兼出版社のノウハウや人脈が現在まで利用されているのである。ここでは論じきれないが、近年みられる社会現象としてのイスラーム復興、あるいは思想や政治運動としてのイスラーム主義の来歴について考える上で、イスラーム出版物の推移が大きなヒントになるはずである。

III. 東南アジア島嶼部における使用文字交代の言語学・文字学

的背景

青山亨「東南アジア島嶼部におけるインド系文字使用についての若干の私見」（本ニューズレター第5号）へのコメント

澤田英夫（東京外国語大学）

東南アジア大陸部で話されるクメール語・ビルマ語・タイ語は現在もインド系文字によって表記される。これらの言語に共通する点として次の2点が挙げられる。

1. 島嶼部で話されるオーストロネシア系言語と比べて音素の数が多く複雑な音節構造を持ち（特にタイ語とビルマ語が声調言語である点に注目されたい）、その複雑な音節構造を過不足なく表記できる表音的文字体系を確立した。
2. 表音的文字体系の確立以後他の文字体系と接触するまでの間に、大きな音韻体系の変化（クメール語の場合には音節初頭有声音の無声化に伴う母音体系の著しい複雑化、ビルマ語の場合には音節末子音の中和に伴う母音体系の変化、タイ語の場合には音節初頭有声音の無声化に伴う声調体系の変化）を被り、その結果、本来はきちんと成り立っていた個々の文字要素とそれが表す音の間の対応関係が崩れた。

これらの言語が既存と異なる文字体系（ローマ字など）を採用しようとした場合、その文字体系が表音的であれば、既存の文字体系で区別できた異綴同音異義がすべて同綴（同音）異義となってしまふ。一方、その文字体系が既存の文字体系の綴字を転写したものであれば、音声と表記との間に大きな乖離が生じる。いずれにしても、母語話者にとってメリットより抵抗感の方が多く感じられるであろうことは想像に難くない。

以上を踏まえて、島嶼部の言語の表記に用いられる文字がインド系文字からアラビア文字やローマ字に交替したという事実の言語学的・文字学的背景を考えてみよう。

1. これらの言語は比較的単純な音節構造を持つため、インド系文字であろうとそれ以外の文字体系であろうと同じように表記できる。言い替えれば、（その言語本来の形式、つまり借用語でない形式を表記するという目的に関する限り）インド系文字が後発のアラビア文字やローマ字と比べて著しく適しているわけではない。
2. 大きな音韻体系の変化を被らなかったため、文字の乗り換えに対する抵抗感が比較的少なかった。

島嶼部における使用文字の交代が、文字の「フロー」としての役割を重視するというこの地域の社会的特徴からも捉えられるべきである、とする青山氏の指摘に対してコメントするのに充分なだけの知識を筆者は持たない。それでも、社会的特徴が文字交替を推進する要因になり得るのは、あくまでもそれに抗する言語学的・文字学的要因がない場合に限られる、とは思う。ここで仮定の話を持ち出すのは明らかにフェアではないのだが、もしも島嶼部に居住する民族がオーストロネシア系でなくタイ系だったとしたら、そしてこの地域の交易語がマレー語ではなくタイ語中部方言だったと

したら、おそらく表記のローマ字化は起こらなかったのではあるまいか。

IV. シンポジウム「ジャウィ文書研究の可能性」報告要旨

2001年12月1日、岡山大学文学部において、東南アジア史学会第68回大会の会員自由企画シンポジウム1として、ジャウィ文書研究会参加者が中心となって「ジャウィ文書研究の可能性 — 壁としてのジャウィ、橋としてのジャウィ —」を開催する。以下は6人の報告者が事前に提出した報告要旨である。

1. 「見えない仕切りを開けて — ジャウィ文書研究の意義と課題 —」

川島緑（上智大学）

本報告の目的は、このシンポジウムの基調報告として、東南アジア研究にとってのジャウィ文書の重要性を検討し、それを研究に利用する際の問題点を指摘しつつ、今後の研究の方向性を示すことである（シンポジウム1「趣旨説明」[本ニューズレター第7号、pp. 2-3に掲載]も参照されたい）。

東南アジア研究において、ジャウィ文書の利用は次の3つの点で重要である。第一は、東南アジア各地の個別の地域社会を、より多面的に検討し、より深く理解するための資料として、第二は、地域社会相互のつながりを明らかにする資料として、第三は、東南アジアと中東、南アジアなどとのつながりを研究するための資料として、である。

ジャウィ資料を用いた研究はマレー語圏の歴史、文学の分野に集中しており、他の時代や分野、および、非マレー語圏に関する研究は概して不十分である。ジャウィ文書には、(1)ローマ字など他の文字表記を知らなかった人が書いた文書、(2)他の文字表記を知っていた人が、ジャウィしか読めない人に向けて書いた文書、(3)他の文字表記を知っていたにもかかわらず、自分たちの文化の独自性を主張するためにジャウィで書いた文書がある。ジャウィ文書は、これらの人々が何を考え、どのように世界を見ていたかを検討するために不可欠な一次資料である。別の言い方をすれば、ジャウィ文書を除外した研究は、これらの人々を無視、あるいは、軽視した研究といえる。したがって、他の資料とともにジャウィ文書を積極的に利用することにより、東南アジア研究の様々な分野において、これまでの研究の歪みを正し、新たな展望を開くことが期待できる。特に実り多い成果が期待できる研究テーマとしては、イスラーム思想、イスラーム運動、民衆イスラーム、政治思想、ナショナリズム、政治的アイデンティティなどをあげることができる。

ジャウィ文書の利用が進まない最大の要因は、研究者の関心の不足にある。欧米、日本、東南アジアにおける社会科学的研究は、概して西洋近代への志向性が強く、ジャウィ文書が伝える思想やその背後にある精神世界を後進的なものとみなし、資料的価値を軽視してきた。多くの東南アジア研究者は、特殊な分野を除けば、ジャウィ文書

は苦勞して文字を学んでまで読むに値せず、せいぜい骨董趣味的な関心の対象でしかないとみてきたのではなかろうか。第二の要因は研究基盤が整備されていない点である。研究工具類に関する体系的な情報入手が困難で、個別に手探りで研究を行わざるを得ず、ジャウィ資料を読みこなせる研究者の数も非常に少ない。国や専門分野をこえた研究者間の協力体制も不十分である。従って、今後ジャウィ文書研究を大きく発展させるためには、東南アジア研究者の間で国別、分野別の「仕切り」をこえた研究協力体制を確立し、さらに、中東や南アジアなど、他地域の研究者とも協力関係を築き、同時に研究基盤を整備する必要がある。

だが、それだけでは十分ではない。ジャウィ資料の利用にあたってもっとも重要なのは、その用い方である。当該社会におけるジャウィ文書の位置づけやジャウィ使用の意味を明らかにせず、やみくもにジャウィ文書を収集し「解説」してもあまり意味はない。

ジャウィ文書は外部の権力による破壊、強奪の対象となった。先祖からジャウィ文書を継承し保存する現地社会の人々が、ジャウィ文書を収集し利用しようとする外部の人間に対し、警戒心や不信感を抱く場合も少なくない。研究の倫理性や、現地の人々との信頼関係、現地研究者との協力体制が重要であることは、あらゆる研究について指摘できることだが、上記の経緯を考慮すると、ジャウィ文書研究においては特に、これらの点に関して自覚を持って振舞う必要がある。

東南アジアの様々な時代や地域に生きる人々にとって、ジャウィはどんな意味を持つのだろうか。何かとの関係を隔てる「壁」なのか、それとも何かとつながる「橋」なのか。隔てられる「何か」、つながろうとする「何か」とは何か。他の報告者や参加者とともに考えてみたい。

2. マレー語圏におけるジャウィの概念：表記法としてのジャウィ、人のカテゴリーとしてのジャウィ

西尾 寛治（東京女子大学）

「ジャウィ」(Jawi)の語源については諸説ある。例えば、「混合」説(T. S. ラップルズ)、「スマトラ」説(G. H. ウェルンドリ, W. マルスデン)、「東南アジア出身のムスリム巡礼者」説(W. ロビンソン)などの説がイギリス人やオランダ人によって提出されている。しかし、近世以降の東南アジア史のコンテクストでもっとも注目されるのは、この語が、「アラビア文字を応用したマレー(ムラユ)語の表記法」を意味したこと、また「東南アジア在住のムスリムあるいはその一部」の呼称として用いられたことであろう。バハサ・ジャウィは前者の用例である。他方、後者の用例としては、マスツ(ク)・ジャウィ(ジャウィになる)、ジャウィ・プカン(町のジャウィ)、ジャウィ・プラナカン(混血のジャウィ)などが挙げられる。

この報告の目的は、そうした2つのジャウィの用法——「表記法としてのジャウィ」と「人のカテゴリーとしてのジャウィ」——に注目し、近世から近代にかけての東南アジア島嶼部の歴史の展開を論じることにある。そのうち、「表記法としてのジャウ

ィ」については、近世を主な考察対象とする。そして、マレー語が交易のみならず外交及び宗教上の共通語として機能していたことを指摘したい。また、ジャウィが地域世界の形成に重要な役割を果たしていたことを示したい。一方、「人のカテゴリーとしてのジャウィ」については、近世から近代までを考察対象とし、この間に人のカテゴリーとしてのジャウィの概念に変容が生じたことを明らかにしたい。このジャウィ概念の変容とは、次の2つの点をさす。すなわち、第1点はジャウィがマレー人に置き換わったことであり、第2点はジャウィが在地民から外来の移住者をさす民族的なカテゴリーへと変化したことである。以上を明らかにした上で、外来の移住者としてのジャウィが、表記法としてのジャウィや地域世界とどのように関わっていたのかという点についても検討してみたい。

なお、報告では、ジャウィの異なるものを結びつける役割、つまりジャウィの橋としての側面を主に論じることになる。

3. 植民地支配下のジャウィ研究—蘭領東インドおよび英領マラヤを事例として

國谷徹（東京大学大学院）

院)

イギリスおよびオランダによる植民地支配は、東南アジア島嶼部における文字使用状況に大きな変化をもたらした。植民地時代以後のローマ字表記の普及については多くの研究がある一方で、植民地支配者たちがジャウィについてどのような扱いをしていたのかは良く分かっていない。本報告では、イギリス・オランダのオリエンタリストたちの幾つかの著作を取り上げ、彼らがジャウィについてどのような認識を持っていたのかを分析してみたい。報告の目的はあくまで植民地支配者側のジャウィに対する認識を分析することであり、実際の社会における文字使用状況についての考察は本報告では行わない。

オリエンタリストたちが行ったこととして、まずジャウィで書かれた様々な文書の分類・カテゴリー化が挙げられる。ジャウィ文書は、歴史書、文学作品、民間伝承、慣習法といった諸カテゴリーに分類された上で研究の対象とされた。これらの諸カテゴリーは基本的に西洋の学問的基準に基づいたものであり、しかも、分類はしばしば、個々のジャウィ文書が現地社会において本来どのようなものとして認識されていたのか、という問題を考慮することなしに行われた。例えば、オリエンタリストたちは様々な詩の形式を収集し分類したが、それらのテキスト群を詩というカテゴリーにまとめることの意味性については、しばしば論じられないままであった。

一方で、実際に現地社会で使用されていたジャウィ（主としてイスラーム教育における使用と、植民地の末端行政における使用とが考えられる）に対しては、オリエンタリストたちは相対的にわずかな関心しか向けていない。1878年にイギリス海峡植民地政府が行政上の必要からジャウィをローマ字に転写するための規則を制定したとき、W. E. Maxwellはこの転写規則をRoyal Asiatic Societyにおいても採用するという提案に反対し、転写規則は「マレーの文字の綴りを正確に再現し」かつ「英語話者をし

て発音の正確な再現を可能ならしめる」ものでなければならない、と主張した。ここでは、現地社会におけるジャウィの綴り方がそもそも統一されていないという事実、ジャウィの綴り方が状況に適應して時とともに変化していく可能性、といった問題は初めから考慮の外に置かれている。

本報告はオリエンタリスト的言説の中でのジャウィの位置付けに関するごく基礎的な分析を試みたものであり、もとより明確な結論を出し得るものではない。しかし、以上に述べたようなオリエンタリストたちによるジャウィ文書の分類・カテゴリー化＝対象化・固定化は、現在の東南アジア研究者のジャウィ文書に対する認識にも様々な影響を与えているように思われる。それらの見直しを行うことは、ジャウィ研究における重要な問題ではないだろうか。

4. 西スマトラのジャウィ文書—20 世紀前半のイスラーム関連出版物から

服部美奈（岐阜聖徳学園大学）

本報告は、20 世紀初頭に始まるイスラーム改革運動のなかで新しいメディアとして現われたイスラーム雑誌とその運動を担ったウラマーの著作を分析することを通して、蘭領東インド期の西スマトラにおいてジャウィがどのような形で使用され、またなぜジャウィが文字表記として適用されたのかを考察することを目的としている。20 世紀前半という時期の設定は、西スマトラでジャウィ表記からローマ字表記への転換がこの時期に起こり、ジャウィ表記とローマ字表記が混在する時期を経て、のちにジャウィ表記の使用が西スマトラにおいて衰退したためである。

分析の対象は、第一に 1911 年から 1940 年までに出版されたイスラーム雑誌 36 誌であるが、その発行時期により前期（1911～1920 年）と後期（1921～1940 年）に分け、それぞれの時期における文字の使用状況および教育普及・識字の状況を背景に踏まえつつ、両時期のイスラーム雑誌の内容とジャウィ表記使用の傾向を考察する。第二にイスラーム改革運動の主要な担い手の一人であったアブドウル・カリム・アムルッラー（Abdul Karim Amrullah: 1879-1945）が残したジャウィによる著作を考察する。なお西スマトラでは、特にアラビア文字表記マレー語あるいはアラビア文字表記ミナンカバウ語を「ジャウィ (Jawi)」と呼ばず、その表記方法を指して「アラブ・ムラユ (Arab-Melayu)」といわれるのが一般的であるが、ここではジャウィあるいはジャウィ表記とする。

イスラーム雑誌発行の初期段階である 1911 年から 1920 年には、1911 年発行の『アル・ムニール』をはじめ、9 誌のイスラーム雑誌が発行されたが、どの雑誌もジャウィ表記が用いられており、うち 8 誌は 20 世紀に入って設立された近代的イスラーム学校を基盤にしている。書き手と読み手の教育的背景からジャウィ表記使用の意味を考えると、1911 年から 1920 年に出版された雑誌の編者たちは、19 世紀後半にミナンカバウで教育を受け、その後メッカでイスラーム学の研鑽に励んだ世代であり、ミナンカバウでは伝統的なスラウでのみ教育を受けている人が大勢を占める。また啓蒙を目的とした雑誌の読み手は、若い世代だけではなく中堅世代、特に批判の対象とされた

伝統的スラウのウラマーたちを対象にしていた。これらの雑誌は、タレカット批判や慣習批判と共にイスラーム改革思想の普及と啓蒙を目的としており、より広い読者層の獲得のためジャウィを使用したと考えられる。またイスラームを論ずる場合、特に留学を経験したウラマーにとってアラビア語を翻訳・注釈する際にジャウィ表記を使用する利便性が高かった。たとえば、アブドゥル・カリム・アムルッラーの著作の大半はジャウィ表記が用いられている。一方、1921年から1940年に発行された27誌のイスラーム雑誌のうち、明らかにジャウィ表記が用いられているものは3誌にとどまり、他1誌はアラビア語によって書かれている。つまり、この時期にはイスラーム雑誌においてもローマ字表記の使用がジャウィ表記を陵駕し始める。1921年以降に発行された雑誌の编者たちは、近代的イスラーム学校で学んだ世代を含むようになっており、彼らが基盤とする近代的イスラーム学校では宗教科目に加え一般科目の教授およびローマ字の導入が始まったこと、さらに特に倫理政策以降の村落学校の普及によるローマ字表記の浸透がイスラーム雑誌におけるローマ字表記増加の背景として考えられる。

5. ジャワ社会におけるペゴン使用の意味

菅原由美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員）

ペゴン (pegon) とは、アラビア文字表記のジャワ語を指す。ジャワでは、アラビア文字流入前に、インド起源のジャワ文字の伝統が存在し、ジャワ文字が王宮を中心に非常に長い間、用いられてきたために、16世紀頃、イスラームの浸透とともに、アラビア文字が流入した後も、アラビア文字がジャワ文字を駆逐することなく、王宮ではジャワ文字が主に使用され、プサントレン（イスラーム寄宿塾）ではアラビア文字が使用されるという並列状態が続いた。17-18世紀には、ジャワ北海岸でパシシル文化が隆盛し、マレーから伝わった預言者や聖人の物語等がペゴンで記述された。しかし、ピジョー (Pigeaud) によれば、19世紀のスラカルタ・ルネッサンスによって、ジャワ文字を用いたジャワ文学が復興したために、アラビア文字の利用は減少したとされており、また、20世紀初頭には、イスラーム改革運動の時流により、アラビア文字の再評価がなされながらも、同時に、植民地政府による、初等教育を通して、ラテン文字（ローマ字）表記がインドネシアを席卷し始めたため、アラビア文字はジャワにおいて、主要な表記とはなり得なかった。

現在、オランダやインドネシアの図書館・文書館に所蔵されているペゴン史料は、数の上から見た場合、ジャワ文字史料に圧倒されており、一般に、ペゴンはコーランやアラビア語テキストに書き添えるジャワ語訳や解説にしか用いられていないと理解されがちである。

しかし、上記のコレクションを見ると、ジャワ文字に圧倒されたとされる19世紀にも、むしろペゴン文書は多く執筆されていることがわかる。これは、一つには、ジャワ各地で、この時期に増加した様々なタイプのイスラーム宗教運動において、運動の

指導者によって執筆されたテキストは、ペゴンで記されていたためであった。アフマド・リファイのように、民衆に教育を与えようとしてイスラームの教科書を書く場合もあれば、神秘主義の教師が予言書を書く場合もあった。また、もう一つの理由としては、ジャワ文字ですでに書かれていたアラビアやペルシャ起源の文学を、中部ジャワの王宮において、ペゴンで書き直す作業が多くなされたためであった。このような二種類の執筆活動から、19世紀にジャワ人が「ペゴンを用いて書いた」ことの意味を考えたい。

6. ジャウイ誌『カラム』から見た1950年代のマレー・イスラム圏

山本博之（東京大学）

1950年代は、マレー・イスラム圏（マレー語とイスラム教が社会に重要な影響を与えている地域）の人々が、日本占領期を経て自治のあり方に大きな関心を寄せた時期であった。それは、1945年に独立を宣言し、オランダとの独立戦争を経て1950年に単一の共和国を樹立したインドネシアだけでなく、1948年に英連邦内の保護国となって独立の道を模索していたマラヤでも同様であった。両地域では1950年代に入ると議会制民主主義への移行が進められ、マラヤでは1955年7月に、インドネシアでは1955年9月にそれぞれ初の総選挙が実施された。

両地域の住民の多数派を占めるムスリム住民は、それぞれ政党を結成してこの総選挙に臨んだ。その結果、マラヤでは、世俗主義的マレー人政党UMNOおよびイスラム政党PASを通じた議会制民主主義の枠内での異議申し立てが制度化され、現在に至っている。これに対しインドネシアでは、四大政党の一角を占めたマシュミ党をはじめとするイスラム諸政党が総選挙で一定の議席を獲得したものの、1956年になると各地で独自の支配圏を打ち立てる動きが起こり、1957年にはこれらの動きが連動して中央政府に対する全国的な反乱に発展した。歴史的に一体の存在としての経験が長く、社会的にも共通の要素が多いにもかかわらず、なぜインドネシアとマラヤのムスリム住民は大きく異なる政治参加の道を進んだのか。

この問いに答えるにはさまざまな角度からの研究が必要であり、本報告ではその一部を検討することしかできないが、その際に、両地域を比較する視点だけでなく、両地域のムスリム住民が相互に影響を与えていたという視点も重視したい。そこで本報告では、1950年代にシンガポールで発行されていたジャウイ誌『カラム』をとりあげ、同誌がマラヤとインドネシアの総選挙前後の政治過程をどのように見ていたのかを、その創刊者で主筆でもあるアフマド・ルトフィの連載記事をもとに検討する。

『カラム』は、1950年の創刊から1969年に停刊するまでの20年間にわたり、国境や民族を超えてマレー・イスラム圏のムスリム住民に読まれていたジャウイ表記のマレー語月刊誌である。創刊者のアフマド・ルトフィはカリマンタンのバンジャルマシンで生まれ育ったアラブ人ムスリムであり、シンガポールに移住して出版業界に入り、『カラム』誌を創刊した。

アフマド・ルトフィは、インドネシアの総選挙後の政治状況を観察する中で、元来は

宗教共同体を指すアラビア語起源の「ウマツ」に別の意味を与え、伸縮自在かつ接合分離が可能な人間集団としての独自のウマツ概念を作り出した。それは、国民と宗教共同体の特徴を併せ持ち、それぞれの長所を柔軟に発現しうる概念であった。本報告では、アフマド・ルトフィのウマツ概念を整理し、それがマラヤ社会を見る際にどのような意味を持ちうるのかを検討したい。また、アフマド・ルトフィがこのようなウマツ概念を作り出した背景を検討することを通じて、アフマド・ルトフィが『カラム』に込めていたであろう「壁として」の役割と「橋として」の役割についても考えたい。

V. 研究会記録

第15回研究会

日時：2002年11月9日（土）11:00-21:30

場所：上智大学四ツ谷キャンパス図書館9階911号室 出席者：13名

1. ジャウイ誌「カラム」記事講読

テキスト提供者：山本博之（東京大学）

レジュメ作成担当者：西芳実（東京大学大学院）

ジャウイ誌「カラム」1955年2月号に掲載された記事を取りあげた。この記事は、西スマトラのイスラーム知識人、ハムカの文章を引用しながら、1920年代末にエジプトで結成された「ムスリム同胞団」の理念が世界各地のムスリムに影響を与えていると論じている。インドネシアのイスラーム政党について言及すると同時に、タイ、フィリピン、ビルマにおけるムスリム指導者にも言及し、彼らを「ムスリム同胞団」の理念の継承者として位置づけている。東南アジアのムスリム指導者が、どのように各地のイスラーム運動についての情報を得、解釈していたかを示す貴重な資料である。

<川島緑>

2. 植民地支配下のジャウイ研究 — 蘭領東インドおよび英領マラヤを事例として — 國谷徹（東京大学大学院）

（要旨は次号掲載予定）

3. ジャワ社会におけるペゴン使用の意味

菅原由美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員）

本報告では、ジャワ社会におけるペゴン使用の意味について、ペゴン使用の歴史的変遷と、ペゴンによって書かれた作品の分類と内容を分析することを通して考察がな

された。発表者からはまず、ペゴン(pegon)は元来、「純粋なジャワ方式ではない」あるいは「ねじれた、斜めの」という意味をもつが、現在はジャワ語のアラビア文字表記という意味で使用されることについて説明があった。

発表では第一に、ペゴンが王宮とイスラームの関係を軸にしたジャワ社会の歴史的変遷のなかでどのように使用されてきたかについて分析がなされた。ペゴンは16世紀のジャワ社会へのイスラームの浸透により使用されるようになったが、アラビア文字がジャワ文字を完全に排除したわけではなく、結果的に王宮とプサントレンでは文字の使い分けがみられた。その後、17～18世紀にパシシル文化が隆盛したが、18～19世紀にはスラカルタ・ルネッサンスによってジャワ文字が復興した。しかし、ジャワ文字の復興によってペゴンの使用が衰退したのではなく、逆にペゴンを用いた作品が増加する現象がみられた。ペゴンを用いた作品の増加は、①ジャワ文字で書かれていた作品がペゴンでも書かれるようになったこと、②プサントレンの増加と宗教運動の隆盛、を背景としている。

次に、ペゴンによって書かれた作品の分類について説明がなされた。発表者は、ペゴンによって書かれた作品を、①アラビア語文献のジャワ語翻訳・行間の逐語訳・解説、②スルック(Suluk)、③プリンボン(Primbon)、④タレカットの知識、⑤宗教書・韻文、⑥宗教文学・プサントレン文学、⑦訓告・道徳、⑧地方の歴史・発祥伝説、の8種類に分類し、そのそれぞれについて解説が加えられた。特に、⑥宗教文学・プサントレン文学は、アラブ起源の文学がマレー語版に翻訳されたのち、ジャワ独自のストーリーが付与されジャワ語版の韻文として発達したものであるが、19世紀にジャワ文字版がさらにアラビア文字版でも書かれる現象がみられた。発表者は、ジャワ文字で書かれた作品がペゴンに書き直された理由として、ウッドワードの仮説に依拠しつつ、①王宮はイスラームを排除しようとしたのではなく統合しようとし、ペゴンがイスラーム性を強調する文字として適用されたのではないか、つまり、王宮も自らがイスラームであるという主張をする必要があったのではないか、②オランダの関与があったのではないか、と推測した。

出席者からは、ジャワ文字で書かれたものがペゴンで書き直された理由として、イスラーム化というより、むしろ大衆化にアラビア文字が一定の役割を果たしたのではないか、ジャワ文字を知る人は限定されていたため文字を学ぶのであればペゴンしかなかったのではないか、などの意見が出された。また、ジャワ文字とペゴンを誰が使用していたのか、つまり文字を使っている人の文化的背景がわかればジャワ社会におけるペゴン使用の意味がより明確になるのではないか、などの意見が出された。〈服部美奈〉

4. Devastation and Revitalization of Tanah Tidung, or Coastal Northeast Borneo (19-20C): An Ethno-historical Reconstruction from Written and Oral Resources of East Kalimantan and Sabah (ボルネオ北東岸の無人化と再移住)

奥島美夏 (神田外語大学)

ボルネオ (カリマンタン) 島北東部——現マレーシア・サバ州東部の、特にキナバタンガン流域以南から、パシール、クタイ王国以北のインドネシア・東カリマンタン州——が、地域を統括する強大政権をもたない政治的緩衝地帯であったことは、その宗主権を主張していた周辺諸スルタネイト (ブルネイ、スールー、バンジャルマシン)、またそれらのスルタネイトからそれぞれこの地域を割譲されたオランダ・イギリス植民地政府の争いなどによってしられている (Irwin 1955; Black 1985)。実際のところ、この地域には外島マレー民や西欧勢にも注目された現地の主要グループがいくつかあった。なかでもスールーやスペインに恐れられたティルン *Tirun* (現地ではティドン *Tidung, Tidong*) や、オランダのみでなくイギリス領でも首狩と戦闘能力で知られたセガイ *Segai* (*Kayan, Modang, Ga' ai* etc.) などは、周辺民にも影響力をもち、交易品となる林産資源の採集や集荷を掌握していた (Majul 1973; Loyré 1997; Belcher 1848; Spaan 1902; Warchlen 1907; Tromp 1897; Warren 1985)。だが、彼らの大半はイスラム教徒でなく「スルタン」の称号も持たなかったために、通商条約を結ぶ相手とはみなされず、したがってブラウ、ブルンガンなどのスルタンから請け負う形でスールー、ブギスなどが対外交易を掌握していた。この構造は、19世紀以降激化したセガイの首狩・林産物略奪などによってボルネオ北東岸のいくつかの地域が過疎化し、マレー商人の活動が下火になるまで続いた (Warren 1985)。

この過疎化と民族勢力再編の時代について書かれたジャウィ文書がある。15枚からなるこの手稿は1918年ごろ、現東カリマンタン州スブク流域のティドンの指導者 *Pengeran Anum* によって語られ、弟の孫にあたる *Abdul Karim* が筆記したものである。もともとボルネオ北東部では地域の紛争調停の際に民族移動史や戦争にまつわる口頭伝承を参照し、誰がどのような正当性を持つかを確認することが多く、特にオランダ領では植民地時代以降にも、伝承をジャウィまたはアルファベットで成文化して政府の承認印を受け、そのまま土地や林産物採集の権利書・許可書 (*surat keturangan, surat peringatan* etc.) として用いていた。 *Pengeran Anum* による文書——ここでは仮にスブク文書とする——も、今日文書を保管している子孫たちによれば、先祖から受け継いだ燕巣の洞窟の権利を確保するために作成されたといわれ、1953年にはヌスカン島の市役所印を受けている。内容は、まず *Pengeran Anum* のもつ燕巣採集権の正当性、すなわち代々スブクの貴族であった先祖の系譜と、セガイの攻撃によるスブク・ティドンの四散からはじまる。語り手の祖父の一族は親族関係のあるタラカン島のスルタンのもとへ移住した。そして約50年後のヒジュラ暦1265年 (西暦1848-49年) に、 *Pengeran Anum* が一族を率いてすでにブルンガン・スルタネイト下にはいった故郷へ戻り、多大な努力と代償を払って内陸の交易網を再建してゆく経緯が語られる。この当時までにすでにイスラム化していたティドンがスルタンや内陸の非イスラム民との同盟や取引をまとめたり、他のティドンの一派と採集権の正当性をめぐって争う

プロセスも描かれており、貴重な資料となっている。

しかし、スブク文書はいくつかのより重要な点を示唆している。まず、ボルネオ北東岸の過疎化の背景には、セガイの無差別攻撃のみでなく、その軍隊を指揮するブルンガンのスルタンの存在があった。また、セガイに攻められる以前のスブク各地のティドン村落はそれぞれの首長(王)を冠し、各村が管理する燕巢洞窟は元来ブルンガン・スルタンではなくその首長たちが直接所有していた。これらのくんだりから、西欧の記録では18世紀後半から台頭したといわれるブルンガン・スルタネイトが、この時期に周辺地域に勢力を広げつつあったことがうかがわれる。特に過疎化が著しかったキナバタンガン、スブク、スカタッなどの河川流域は、こうした新興スルタネイトや植民地政府の脅威であったために討伐された可能性も考えられる。

さらに、この文書と同じ地域内の口頭伝承(筆者自身の現地調査データを含む)や西欧側の記録とクロス・チェックしてゆくと興味深い結果が得られる。1848年から派遣されたオランダ視察団によれば、おそらくスブク文書の当事者たちと思われるタラカン島からの移住者たちが1849年にスブク河口に仮村を建てたが、その後ブルンガンのスルタンが他の場所へ移したという(Dewall 1855)。この当時、スルタンは交易活性化のために、海賊行為を働いたり外島商人の邪魔になりそうなティドンの下位グループのいくつかを掃討している(ibid.)。また、タラカンは農業によって地力が低下しており、スブク以外の地域にも多くの島民が移住していたという(ibid.)。したがって、過疎化地域の再建は19世紀半ばに一部はじまっていたが、首狩・海賊行為の鎮圧によって住民たちが帰郷するという単純ないきさつばかりではなかったことがわかる。

タラカンを海賊の巣窟と記述するオランダの資料と対照的に、ボルネオ北東沿岸部のティドンは全般にタラカンを過去における政治的・文化的中心地のひとつとみなしている。タラカン・スルタネイトの伝承によると、ブルンガン・スルタネイトの始祖はブルンガン(現カヤン)河流域に進出したタラカン王族であったが、当地のコロニーでセガイなど他の現地民やスルー貴族との通婚が進むにつれ、ティドンではなくブルンガン族としてのアイデンティティを主張するようになり、やがて独立を宣言する。その後しばらく両スルタネイトの間では戦争が続くが、次第に林産資源と内陸民の労働力を後背地にかかえたブルンガンが優勢となった。このブルンガン王族の系譜には、隣国ブラウのスルタンとの血縁を通じてセガイを動かしスブクを含むタラカンスンボルナ間の広範囲にわたる地域を荒廃させた、上述のスルタンの名前もみられる(Amir Hamzah 1998)。その他の地域のティドンたちによる口頭伝承からも、この当時いくつかの主要ティドン勢力の間で覇権争いがくり返されていたことがわかる(Okushima 1998; Sellato 2001)。すなわち、ボルネオ北東岸の過疎化と再建は、地方政権の移行にともなう民族分布図の塗り替えという、より大きな流れの中でおこっていたのだ。

植民地政府その他によるタラカンの弾圧と衰退は、ボルネオ北東岸に広く分布していたティドンの一部に「ブルンガン」「ブラウ」といった新たなアイデンティティを創出させる一因となったと思われる。ブルンガン・スルタンの子孫たちはタラカン伝承のように、ティドンではなくセガイ(カヤン系言語族)の系譜や起源神話をルーツとして記憶しており(Okushima 1998; Beech 1908, Akbarsyah 1997も参照のこと)、またブルンガンのカヤン系民も他のダヤク諸グループよりステータスが高いとされる。

内陸部での戦争の鎮圧や交易品の採集にももっぱらカヤン系民が活躍したと語られている。ただし、スルタネイトの母体とみなされる諸民族の中には、カヤン系民より古くからの地元民であるティドンなども含まれており、ブルンガン・マレー語も圧倒的にティドン語に近い。また、スルタンの末裔もカヤン系民も、スールー（タオスグ）とバジャウ（サマ）の連合軍がボルネオ北東部を悩ませた時代には、各地のカヤン系民は潮の干満などの海洋知識がないために苦戦し、海戦の得意なティドンや他のイスラム教徒の軍を頼ったことを認めている (Kaskija 1992; Okushima 1998)。

ブルンガンよりはるかに古いブラウ・スルタネイトの名が、かつてボルネオ北東岸全体を漠然と指す名称であったらしいことは西欧にも知られている (Hageman 1855; Dewall 1855; Irwin 1955)。タラカン伝承によれば、ブラウはティドンの伝説的王ブラユッ（またはブナユッ）に由来する。北東岸の大半のティドンに知られたこの王は、現在のブラウ河ではなくスプク河口に住んでおり、タラカン王族の始祖の5世代上にあたる。タラカン王族がイスラム化するはるか以前の時代、ブラユッ王国はクタイ王国まで勢力範囲を広げ、滅びたのちも子孫がタラカン、ブラウ、ブルンガンなど各地に新たな王国を作ったという (Amir Hamzah 1998)。他方、ブラウ王族の伝承では名の由来は不詳だが、やはり古名はブラユともいい、スルタネイトの母体となった7つの民族の1つはブラウ沿岸部からキナバタンガン流域までをテリトリーとしていたという (Noor 1991, 1996)。7つの民族にティドンが含まれているどうかは不明で、これらの民族が統合された際に選ばれた新王は内陸の狩猟採集民の出身であったとされる。しかし、西欧の記録にはブラウの住民を Tedong と記したものもあり (Forrest 1779; Leyden 1814)、少なくともティドンがブラウ、ブルンガンにかけて広く散在していた時代があり、彼らの祖先であるブラユないしブラユッが彼らの居住区域を指す代名詞として用いられた可能性を裏付けている。またその動機としては、ブラウ王国の母体が統合された際に、由緒ある王の子孫であることを記念してその名を新たな国または民族名としたか、タラカンその他の同族との競合過程で自らの王権の正統性を強調するために用いた可能性などが考えられる。その後スルタネイトが外島マレー貴族との通婚などによって二分立すると、遷都ごとに両スルタネイトは移住先の地名でも呼ばれるようになり、ブラウはもっぱらブラウ流域をさす名称となる。

以上のジャウィ文書その他の現地データから、ボルネオ北東岸の過疎化とそれらの地域への再移住は、競合する外島勢力の進出に対する、現地の民族勢力圏再編というレスポンスの一環であったことがわかる。スルタンを名乗り植民地政府を受け入れたことでブルンガンやブラウは地方の支配者となり、イスラム化しなかった同族たちや、林産資源を採集する後背地を確保できなかったタラカン、その他の沿岸島嶼部の小王国は、野蛮な内陸民ダヤクとして次第にスルタネイト内部に組み込まれ、あるいは海賊として一掃されていった。この他にもまだ、研究者によって「発見」されていないジャウィ文書がいくつか土地の継承者や郷土史家のもとに保管されており、未収録のおびただしい口頭伝承とともに解説・分析される機会を待っている。外島勢力による記録のみからはわかりえない、さまざまなレベルでの現地勢力による「弱いヴァージョン」の地方史観をも解明することによって、東南アジア島嶼部の特に文字資料の少ない地域にさらなる研究の可能性がもたされることを願いたい。〈奥島美夏〉

このニュースレターはジャウイ文書研究会の記録、および、ジャウイ文書研究に役立つ情報提供を目的としており、研究会出席者に会場で配布しています。研究会に出席できない方でこのニュースレターの入手を希望される方は、希望する号を明記し、あて先を記入し、240 円切手を貼った A-4 サイズ返信用封筒を同封の上、お申し込みいただければ、郵送いたします。なお、研究工具や資料、文献の紹介、研究報告など、投稿を希望される方は、事務局にご連絡ください。

ジャウイ文書研究会ニュースレター 第 8 号

(2002 年 11 月 30 印刷)

2002 年 12 月 1 日発行

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話：03-3238-3697 Fax：03-3238-3690

e-mail：midori-k@sophia.ac.jp